

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話：070-1503-6401/044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第 183 号

草創期の柿生
 中学校-補遺

その 4(最終回) 卒業の日が近づいて

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

このシリーズの第 1 回「30 人の中学 3 年生」に、私はウカツにも「広大な施設を持つ登戸研究所は、当然米軍の爆撃の対象となり大きな被害を受けていましたが、」と記しました。この記述について、登戸研究所保存の会の世話人を務める森田忠正様より、研究所は爆撃を受けていない旨のご指摘をいただきました。確かに登戸研究所は爆撃を受けておらず、生田中学校が使用を認められた廃屋は、ポツダム宣言受諾後に米軍の接収を恐れて大量の書類や機材などを焼却処分した際の火勢によって生じたものだったことが分かりました、森田様ご指摘有難うございました。

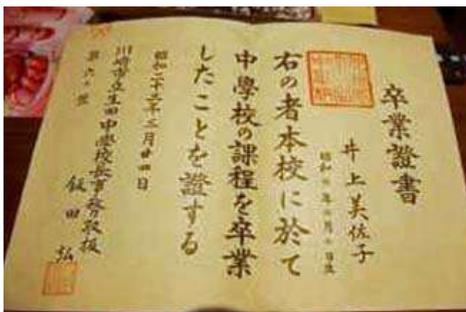
*

GHQ は、占領軍の駐留用地として、慶応大学の日吉キャンパスと溝口の高津高等女学校(現在の市立高津高等学校の前身)の校舎を接収、登戸研究所の跡地は文教施設とするよう日本側に通告、同研究所の主たる研究施設のあった北側の主要部分を日吉キャンパスの代替地として慶應大学に、谷を挟んだ南側を高津高等女学校を中心とした川崎市の教育施設として利用するという日本側の案を了承したのです。慶応大学の用地は、占領の終結によって明治大学に譲られ現在に至ります。川崎市側は、高津分校は高津に戻り、生田中学校だけが残り、用地の残りの部分は、次第に民有地となって今日に至っています。

さて、生田中学校の 1 期生 98 人は、2 クラスに分かれました。下級生との交流は、教室が離れていたせいとかほとんどなかったようですが、全員集められて一緒に作業することも多かったようで、男子は男子、女子は女子でまとまって次第に親しくなっていたようです。ただ、クラス担任の性格なのか、A 組の生徒は次第に放課後も居残って先生の手伝いをするのが多くなったようで、特に秋以降、プリントによる授業が行われるようになると、先生が書き上げたガリ版用原紙を受け取って、せっせと印刷する役目を果たしたりしたようです。当然数人の生徒が輪になってワイワイ言いながら手伝うのですから、楽しかった記憶として 75 年後の今に残ったようです。電車通学の柿生組の生徒たちにとって、朝の通学は猛烈な混雑に悩まされましたが、帰路はラッシュ時間を外れますから、クラスの仲間と柿生までの帰路の電車は楽しくおしゃべりできる時間でした。A 組と B 組で帰りの時間は違いましたから、クラス仲間が一緒でした。どんな話をなされていたのか?と伺ったのですが、さすがに皆さんお忘れになっていらっしゃいました。卒業が近づくと、男子仲間では卒業後どうするかが話題になったようですが、ほとんどみな当面家の手伝いをしながら様子を見るといったところだったようです。

こうして卒業の日、昭和 23 年 3 月 24 日を迎えたのです。向学心に燃えた 98 名の 3 年生たちに、満足のいく学びの場を提供できなかった無念さからか、校長事務取扱の飯田弘先生は、勉学好きの生徒たちの家庭を何度も繰り返し訪ねては、定時制でもよいからと、新制高等学校の受験を勧め続けたのですが、ほとんど成果を上げることが出来なかったそうです。

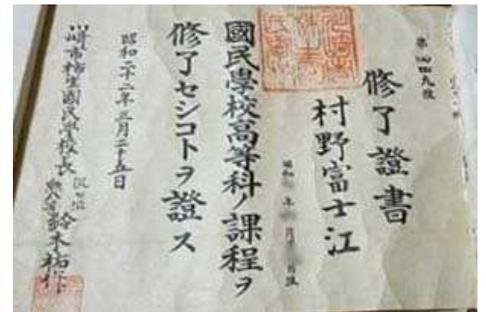
徒労に終わることを厭わず、卒業生の家庭を訪問し続けた飯田先生のお気持ちは、進学希望がかなわず悔し涙を流した生徒たちの胸にもしっかり届いていました。(2 面に続く)



井上美佐子様の卒業証書。男子 55 名に続いて、第 56 号からが女子になりました。



昭和 22 年 3 月柿生国民学校高等科女子の卒業写真
 この内 7 人が新制生田中学校の 3 年生になりました。



昭和 22 年 3 月 25 日、柿生国民学校高等科の最後の終了証書。(村野富士江様提供)

3 年生として生田中学校に進学した 30 名の生徒の内、23 名の男子は、ほとんど皆家業を継ぐか、近場か南武線沿線企業に就職する道を選び、向学心の強い若者は、勤労青年のために設けられた新設高校の定時制に通うのが常でした。白鳥(当時は片平)にお住まいの中山吉弘様は、やがて水道局に入り、苦学して工学院の定時制を卒業、技師の資格を取って、長く浄水場の運営に活躍されました。また卒業生の記録を掘り起こしてくださった土方工作様は、その後細山スタジオを建設して運営。東映と契約して、何本もの東映の劇場用やテレビ用の番組が、細山スタジオで撮影されるのを、裏方として支えられました。私も良く覚えている、お馴染みの仮面ライダーシリーズも土方スタジオで撮影されたと伺い、大いに驚かされました。女子はどうだったのでしょうか。

向学心に富んだ女子生徒の進学問題には、当時まだ根強かった「女に教育は必要ない」と言う、大家族時代の村と家の空気が重くのかかかっていました。しかも悪いことに彼女たちの進学希望に真っ先に反対したのは、母親や祖母、さらには姉妹たちだったのです。古い殻を破ろうとする意欲を挫き、何事もなかったかのように繕おうとしたのは、同性の女性たちだったのです。飯田先生の熱心な勧めにあって、父親が進学を認める方向に傾いたとき、母親がそうなさるなら私は家を出ますと荷物をまとめたため、家のためにと、泣く泣く進学をあきらめた方もあったのです。結局 7 名の女子生徒は全員、家庭に入り家の手伝いをしながら、嫁入り修行のためのお稽古に通う日々を過ごしたのです。

稿を閉じるにあたって、生田中学校は何故、文部省すら考えもしなかった新制中学校の 3 年生を募集し、しかも学区の範囲を越えて稲田地区や柿生地区にまで受け入れ枠を広げたのでしょうか。

生田中学校の初代校長を務められた遠矢一先生は、大変な勉強家で学識に富み、30 代前半だった昭和 17 年(1942 年)に、A5 版 390 頁を超える大著『女子青年学校経営』を出版しています。青年学校は、主として高等小学校を終了して働き始めた若者に学びの場を提供する、勤労青年のための定時制学校でした。勤労青年の学びの意欲をよく知る先生は、1947 年(昭和 22 年)に新制中学校がスタートするにあたり、生田中学校校長として着任する内示を受けると、同年 3 月に国民学校高等科を終える生徒たちの行き場がなくなっていることを知る立場から(青年学校普通科は 1947 年 4 月 1 日で廃止)、自ら校長を務めることになる生田中学校に、国民学校高等科の修了生を、新制中学校 3 年生として受け入れようとお考えになったのです。



遠矢一先生
向丘中学退任時

文部省は校舎も教員も教育課程もない状態の新制中学校に対し、新 1 年生は義務教育となるので全員入学、2 年生は小学校の高等科が廃止となるので、新制中学校 2 年生として希望者のみ受け入れる(義務教育ではないので転入するか中退するかは自由)としただけで、高等科の課程を終えて卒業した生徒たちのことは、全く考えていなかったのです。教育委員会もなく、学習指導要領すら準備が間に合わない時期でした。川崎市当局と折衝した遠矢先生は、「市としては関与しないので、ダメとも言わない」という態度を確認し、いわば校長独断の形で、3 年生の受け入れを決め、稲田地区や柿生地区の若者まで受け入れたのです。何しろ廃屋利用になりましたが、校舎には困らなかったからです。遠矢先生の英断と、混乱中を幸い行政の黙認を取り付けた手際が、98 名の生田中学校 3 年生を生んだのです。それだけに戦時中の書物の僅か数行が、軍部と皇国史観に媚びているとして志半ばに公職追放の憂き目にあったことは、納得もいかず無念極まりないことでした。「思い当たるのはわずか数行の記述。あの記述で何故私が…」と後年に生田中学校の記念誌に記されています。そんな先生が職を去ってからも気にかけてのが、飯田先生に後事を託した 3 年生のことでした。秋に入ると中学校から東生田駅への通学路の近くに 1 軒の貸本屋が店開きしました。蔵書家でもあった遠矢先生がご自分の蔵書を並べて開いたのです。ご本人は、生活のために自分にできる仕事を始めたと言っていたそうですが、それなら



史料館の生田中 1 期生セミナーにお出かけ下さった 1 期生の皆様 左から土方工作様、中山吉弘様、横山(伊藤)幸子様、井上美佐子様

もっと繁華な駅近に開いた方が効果的です。明らかに読書好きの教え子たちを気にかけて、個々の生徒にあった読書指導ぐらいはしてあげたいという、先生の気持ちが伝わってきます。後事を託された飯田先生も、この店を訪問しては 3 年生たちの将来について語り合ったのでしょうか。足を棒にしての 3 年生宅訪問と進学の勧めも、遠矢先生との合作だったのかもしれませんが。

飯田先生は 3 年生を送り出すと、市内の新設中学校の校長に転任して新しい道を歩み、遠矢先生は 1952 年春に公職追放が解除されると、すぐに川崎市立中学校の校長に復帰、向丘中学校校長を最後に定年を迎えられました。 完

シリーズ
麻生区の地名 その8

五力田の地名

菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

片平郷の枝村として永禄 2 年(1559)の『小田原衆所領役帳』や文禄 3 年(1594)の『片平郷御縄水帳』では石高が記載されていません。慶長 4 年(1599)ころに伍力田村が独立したと思われます。

正保年間(1644~48)の『武蔵田園簿』に「朝倉氏知行 高 39 石 8 斗余、うち田方 27 石 1 斗余、畑方 12 石 7 斗余」とあります。200 年後の明治元年(1868)の『旧高旧領取調帳』に「朝倉氏知行五力田村 高 79 石 2 斗余」とあるところから、耕地が約 2 倍に増えたことがわかります。

五力田の地名由来には、大力の男が五人力で開拓したとか、五人の農民が力を合わせて開発したという説がありますが、五反田と同じで土地を分割しても五反程度しか割り当てられない狭い土地と考えるべきでしょう。

『風土記稿』に載る小名は赤せき、六所谷、諏訪谷の 3 つが載り、明治初期の字名は大台と小台の 2 つがあります。

赤せきは字大台にあり、片平村にも同名の小名があり、麻生川に面した場所で、古沢川が麻生川に合流する付近に堰がありました。五力田と片平の山がせり出しており、崖の土の色から赤堰と呼んだと考えます。

諏訪谷は字小台にあり、諏訪社があったことによります。明治 44 年に片平の白鳥神社に合祀されました。諏訪谷は五力田の一番奥に位置して、川の源流部にあたり、オキ(沖)、日向畑などの通称地名があります。諏訪の地名は狭隘部の意もあり、河川に影響されたところで、諏訪社を勧請したものと思われます。

六所谷は字小台にあり、六所社があったことによります。六所社も明治 44 年に片平の白鳥神社に合祀されました。府中の大国魂神社(六所社)と関係があるかもしれませんが、由来は伝えられていません。

五力田には神社がないことにはなりますが、六所社の跡地に個人の金神社が立っています。

古沢のところでふれた、二十塚について、『風土記稿』の伍力田の項で入定塚は「平尾村界ひにあり、何ものか入定せし跡のしるしなるべけれど、其の由来を伝えず、敷の広さ 2 間四方ばかり」と載ります。入定ですから即身仏を意味し、生きたまま塚に入り仏になるということです。入定塚の周辺には小塚が並び、十三塚と呼ばれています。平尾境に稲城市が「十三塚」の史跡の説明碑を設置しています。古沢の二十塚は入定塚が訛ったものか、十三塚など複数の塚があるところからの地名ともいわれています。

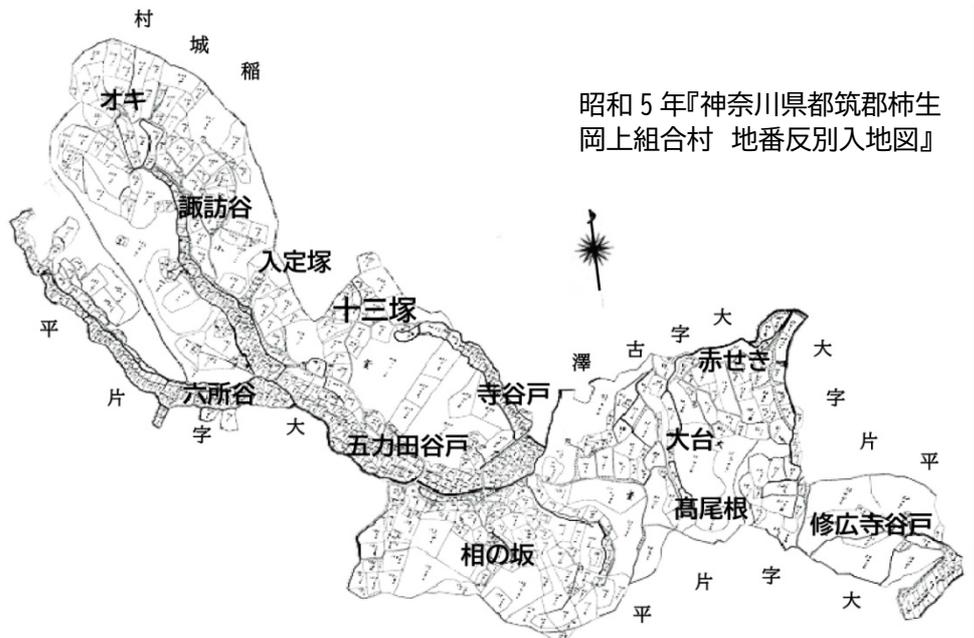
江戸時代初期に五力田・古沢の両村と平尾村の間で入会地の境界をめぐる争論があり、貞享 3 年(1686)に幕府の裁許が下り、絵図には十三塚を境界線として記されています。十三塚は自村に災いや厄病が入ることを防ぐ宗教施設と考えられています。

五力田は戦後も近郊農業の野菜栽培が盛んに行われ、現在も周辺農家の野菜集荷施設があり、各地にある野菜即売所への配送を行っています。

五力田地域が大きく変化するのは、昭和 47 年(1972)の柿生第一区画整理事業がはじまり、小田急多摩線敷設に伴う宅地造成です。そして、昭和 49 年に小田急多摩線により、五月台駅(小台)と栗平駅が開設されました。

昭和 51 年(1976)、区画整理後に住居表示が行われ、白鳥 1~3 丁目が成立します。白鳥の町名は、白鳥 2 丁目(片平)にある白鳥神社の名前から付けられました。その後、平成 14 年(2002)に諏訪谷の奥が造成され、住居表示実施により白鳥 4 丁目となりました。白鳥 1・4 丁目と 3 丁目の一部が五力田です。

昭和 57 年(1982)に五月台駅周辺に住居表示が実施され五力田 1~3 丁目が成立します。五力田 1 丁目はほとんどが片平で、古沢と接する地域が五力田 2・3 丁目となりました。



寺社の風景

菊理媛大神(くくりひめのおおかみ)のお言葉(前篇)

白山神社 禰宜 川島佑太

白山神社(白山社)は、古い資料では江戸初期からその存在が認められており、長い間この柿生の地に鎮座している神社です

本宮は石川県の白山市にあります。祭神は菊理媛大神(白山姫命)です。どのような経緯で勧請したのかはわかっておりませんが、白山神社は北海道から九州にかけて約三千社あると言われていたため、分社は珍しいものではないと考えられます。

柿生は昭和後期までは「川崎最後の秘境」と呼ばれるほど、自然が残っている地域だったといえます。昭和後期にニュータウン計画で切り開かれたことで、団地が建ち並び道路が整備された、今の姿になりました。とはいえ今でも地形の高低差の激しさに、かつて秘境だった頃の面影が浮かんで見えます。

当社は鳥居や社務所は平地にあります。社殿は白山神社の名に恥じず、参道から急な階段を数十段上った山の上に建っています。厳しい階段を上るだけ、社殿に辿り着いた際の喜びはひとしおです。

白山本宮は、白山信仰の神徳として「水の力」と「心むすび」を挙げています。

「水の力」は白山から流れる手取川・九頭竜川・長良川・庄川の四大河川が由来です。当神社も近辺に湧き水池があり、水の恩恵を受けていました。

柿生は農村地帯で、明治には水泥棒もよくあったといえます。「水の力」を求めて当神社を参拝する人も多かったのでしょう。

当社の本殿(右写真)は幕末期に作られたものです。総檜・素木造りで各所に獅子や仙人の彫刻が施されています。特に龍が掘られている箇所が多く、それもまた水に纏わりつくところが大きいのかもかもしれません。



柿生郷土史料館催物案内

【参加自由、入場無料】

◎開館日：8月5・19・26日(毎土曜日)

9月10・24日(毎日曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時

期間：8月5日(土)～12月16日(土)

会場：柿生郷土史料館特別展示室

今では知る人も少なくなりましたが、真福寺から柿生中学校脇を通過して上麻生に抜ける道には、柿生隧道と命名されたトンネルがありました。柿生隧道という名称は、当時の金刺市長の命名です。トンネルの長さは60.1m、当時は川崎市で唯一のトンネルでした。

完成は1951年(昭和26年)9月。1978年(昭和53年)に取り壊され、現在のような切り通しになりました。

現在と違って、土木工用の大型機材のない時代です。どんな風にトンネルを掘ったのか、工事はどのように進んだのか。地元の先輩たちが今に残してくれた写真を見ながら、皆で想像してみましょう。



第88回 カルチャーセミナー

幕末の小笠原について(仮題)

日時：9月10日(日)

13時30分～15時30分

講師：岩本陽児氏

(和光大学現代人間学部教授)

江戸時代の日本は外航船を持たずにいましたから、当然無人島だった小笠原諸島の存在など、ほとんど知られていませんでした。そんな日本が何故小笠原諸島を日本領に出来たのか、地名の由来と共に語っていただきます。

